
とある男の拘束具（ハンドカフ）

哀しき甘党侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の拘束具
ハンドカフ

【Nコード】

N3498Q

【作者名】

哀しき甘党侍

【あらすじ】

あらすじ：―学園都市―そこは文字通り学生の街。様々な教育機関があり、人口、約230万人のこの街は能力開発により、学生達が科学的に超能力を使うことの出来る街でもある。

―この街の能力者、紫堂燎矢しどうりょうやはある事件をきっかけに能力を封じられた、能力を封じる手錠『ジャマー』によって―

— 人物紹介 —

あらすじ：— 学園都市—そこは文字通り学生の街。

様々な教育機関があり、人口、約230万人のこの街は能力開発により、学生達が科学的に超能力を使うことの出来る街でもある。

—この街の能力者、紫堂燎矢しどうりょうやはある事件をきっかけに能力を封じられた、能力を封じる手錠『ジャマー』によって—

登場人物 # 1

紫堂 燎矢しどうりょうや

能力：限界突破リミットキャンセラー レベル 4

能力解説：体のリミッターを強制的に解除し、超人的な身体能力、回復能力を得ることができるが1日に発動できるのは1分間。それをオーバーすると肉体が自壊していく。

人物解説

age 17歳

身長：179センチ

体重：68キロ

学園都市で便利屋を営む赤髪の青年。孤児院で育った置き去り（チャイルドエラー）で天涯孤独。7年前に孤児院が何者かの襲撃によ

り炎上し生き残ったのは燎矢と愛佳だけである。そのとき、何も出来なかった自分を悔やんでいるが、めったに表には出さない。

スキルアウトやジャッジメント、アンチスキルの間では、要注意人物と認識されている。

普段はつなぎにブーツとラフな格好だが、美女絡みの依頼のときにのみ黒いロングコートに胸元が開いたワイシャツ、下も黒いスーツボンと黒づくめになる。本人はカッコいいと思っているが愛佳からは地味の一言で一蹴された。

普段の態度のせいでめったに女の子が近づいてこないが容姿は悪くない。

戦闘はサバット、テコンドーなどに似た脚技（本人曰くあくまで自己流）を得意とし能力を発動しなくとも十分高い戦闘力を持っている。

性格：女好きで軽い性格で三枚目色が強いが、気に入らないものとはことん気に入らない横暴な面もある。趣味はお菓子作り。暇さえあれば寝ているかお菓子作りをしている。普段の依頼はめったにやる気を出さないが美女絡みの依頼だと人一倍やる気を發揮する。困っている人をほっとけない優しさもあるが、その性格上、優しくと思われることは少ない。美女は問答無用でほっとけない。

勉強はやる気無しだが、出来ないわけではない。記憶力（特に美女の顔と名前、スイーツのレシピ限定、稀に依頼関係）と判断力、洞察力に優れている。

口癖は「気に入らねえな。」

女は何があっても殴らないをモットーとしているが『巨乳と尻軽は信用しない』と豪語している。

事件以来、特に愛佳の前ではおどけたり、軽口を叩くなど道化のような振る舞いをしている。それは自分の弱さを見せないためであると同時に愛佳が少しでも事件を忘れてくれたらという気持ちから自然と身についたもの。

愛佳との恋愛関係などの質問には決まって、「想像にまかせる。」などと軽口で受け流してしまう。そのため、燎矢自身どう思っているかは口にしない。

甘党で好物はスイーツ全般と甘口カレーにはちみつを大量投入した超甘口カレー。

事件後の生い立ち：事件後、愛佳と同じ施設には移らず「今はお前の側に居ることはできない、でもいつか必ず迎えに行く。」という言葉を残して愛佳の前から姿を消した。そして、第一九学区でストリートチルドレンとして生活していた。

スキルアウトによく喧嘩を売られては買い、いくつものスキルアウト集団を壊滅させた。第一〇学区のストレンジ（スキルアウトの活動拠点）ではその容姿から「紅鬼」と呼ばれていた。その3年後、キャサリンに拾われ、住む場所（キャサリンの店の二階）を与えられ。同時にキャサリンの権力により中学2年に編入した。そこで愛佳と再会したが再会した当初は、また護れないかもしれないという恐怖から距離を置いていたが、愛佳が事件に巻き込まれた際に助けたことで彼女を護り切る覚悟をする。

その後、愛佳と同じ高校に通う。
便利屋稼業は元々キャサリンがやっていたが、燎矢に譲り現在の便利屋に至る。

まいば
舞羽 愛佳 あいか

能力：なし

人物解説

age 17 歳

身長：168センチ

バスト：76センチ

ウエスト：57センチ

ヒップ：81センチ

ウェーブのかかった栗色の髪で、普段は制服の上に白衣を着ている。書類やパソコンを使うとき、また研究中はメガネをかけ髪をポニーテールにする。

私服は可愛い系が好みだが、たびたび燎矢に『キャラじゃねーな』と言われる。

燎矢曰く、お前はクール系がゴスロリが似合うとのこと。

学園都市の学生でありながら技術開発部門において、神童と言われるほどの天才。

彼女も置き去り（チャイルドエラー）で燎矢と同じ孤児院だった。孤児院の火災で背中に火傷の跡がある。

心の奥で自分を責め続ける燎矢を理解する唯一の人物。

暇なときは便利屋を手伝っている。美女の依頼しか受け付けない燎矢に代わり、普通の依頼を受けたりしている。

性格：普段はおしとやかでクールな美少女で通っているが、親しい人の前では毒舌。それにより主にツツコミである。少々ツンデレ氣質。

可愛い物と猫が大好き。

学校にはファンクラブもあるらしい。

地味に貧乳を気にしている。

孤児院時代は明るく活発な性格であったが、事件がきっかけで一時は笑顔を失っていた、しかし燎矢に再会したことにより、少しずつ笑顔を取り戻した。事件のトラウマで現在でも火が怖い。

照れたり、恥ずかしくなると常に持ち歩いている「たぬ吉くん人形（Sサイズ）」を握る癖がある。

研究に没頭すると食欲が爆発するが本人曰く、まともに太ったことは無いらしい。

事件後の生い立ち：事件後すぐに別の施設に引き取られた。事件のショックと唯一の家族である燎矢と引き離されたことにより笑顔を失う。だが、燎矢の言葉と二度と自分と同じ境遇の人を生まないように、その人たちを護れるものを創りたいという思いを支えに勉強に没頭した。

そして中学に入学と同時に才能が開花し武装兵器開発チームに抜擢された。そして、中学2年の時に偶然編入してきた燎矢と再会するも燎矢が距離を置いていることに気がつき彼女も距離を置いた。しかし、ある事件に巻き込まれたことで燎矢に助けられ改めて燎矢の側に居たいと思うようになった。

そのせいか、工業系のエリート校の推薦を蹴って燎矢と同じ普通高

校に入学した。（研究チームは継続している）そして、現在に至る。

また、燎矢に対し恋愛感情はあるのかという質問をされると全力で否定するが、周りは愛佳の癖（上記参照）を知っているため本気なんだと確信している。

―人物紹介―（後書き）

注意

この作品はとある魔術の禁書目録の世界観にオリジナルのキャラとストーリーを織り交ぜて書いたものです。原作と異なる場合がありますのでご了承ください

ブローグ〜7月21日（はじまり）〜 #1（前書き）

「俺、紫堂燎矢はこの街で便利屋を営みながら高校生活を送る青少年だ。だが、ある日俺は、訳もわからず右手に妙な手錠をかけられた。『ジャマー』と呼ばれるこの拘束具によつて俺の日常はぶつ壊れた。あの忌々しい7月21日を俺は恨む・・・」

ブログ〳〵7月21日(はじまり)〳〵 #1

・その日俺はいつものようにファミレスに居た・

燎矢「その可愛いバニーちゃん！期間限定イチゴの特大パフェを1つ」

赤髪の青年、紫堂燎矢はうさ耳を装備したウェイトレスに向かって言い放った

満面の表情だ・・・

ウェイトレス「申し訳ございません、こちらの商品は最低でも3名様以上でないとご注文できないのですが・・・」

ウェイトレスが申し訳なさそうに燎矢に向かって軽く頭を下げた

燎矢「あゝ、大丈夫大丈夫！俺、甘いもの好きだからさ。」

先ほどと同じ満面の笑みでウェイトレスに親指を突き立てる

燎矢「大丈夫大丈夫！今日朝からなんにも食べてないからさ。それより、俺ア、君みたいな可愛い子がこんなファミレスで働いてることに不思議でしょうがない。よかったら俺の秘書とかやらないかい？」

燎矢はウェイトレスに名刺を渡す
そこには

便利屋 紫堂燎矢

- わたくしは、美しき女性の味方です -

所在地：第一五学区 雑居ビル桃源郷2F 紫堂ユーティリティ
エンタープライス

と書いてあった

ウェイトレスは戸惑い、思わず

ウェイトレス「パフェですね。か、かしこまりました。」

と言ってしまった

燎矢はさらにウェイトレスに言った

燎矢「パフエは決まった、次は秘書の件だ・・・」

ウェイトレス「え、あ、あの・・・」

燎矢はウェイトレスの手を握り迫る
その時燎矢の向かい側から拳が飛んできて燎矢のこめかみに見事命中した

???「いい加減にしなさい!!あ、私ホットケーキと白玉あんみつ、チョコバナナクレープにチーズケーキ、それと、アイスコーヒ

ウェイトレスはいい加減にしてくれと、心の中で思ったことだろう
軽く引きつった笑顔で一礼すると、逃げるように厨房のほうに向かった

燎矢「イテテ・・・オメ、いきなり何すんだよ？」

燎矢はこめかみを押さえながら向かい側に座る白衣を着たポニーテールの少女に言い放った

「???」うるさい、アンタが馬鹿マイバなことをするからでしょ!!。それに私にはオメーじゃなくて舞羽アイカ 愛佳アイカってちゃんとした名前があるんだからね。」

燎矢「もう少しだったのによ・・・」

燎矢はコップに入った氷を食べながら言った

愛佳「アンタも分かりにくいボケをありがとつ。」

燎矢「いや、今の明らかツツコミだろ？」

愛佳「そうなの？」

愛佳はパソコンのキーを叩きながら話半分に燎と話していた

燎矢「ホント、お前は仕事熱心だな。彼氏がこんなにも一生懸命ト
ークしているのにさ・・・」

愛佳「か、彼氏！？・・・な、何言ってるのよ？少なくともアンタ
が、か、彼氏だったらとつくに飛び降り自殺してるわ！！」

愛佳は顔を赤らめながら大声で否定した

燎矢「冗談もわからないとは、色気が微塵も感じられないな。」

愛佳「余計なお世話だ！」

燎矢「ま、それはさて置き、いつもよりやけに熱心だな。なにかあったのか？」

愛佳「別に。ただ、手柄を持ってかれただけってだけの話よ。」

愛佳の目つきは鋭く、パソコンから目を離さない

燎矢「負けず嫌いだねえ」

愛佳「うっさい！・・・あ、そうだわ、アンタにこれを渡しておくから」

愛佳はおもむろに白衣のポケットから何かを取り出し、燎矢に渡した

燎矢「なんだ、この指輪は？」

愛佳「これは、私が開発した・・・というか、まだ開発段階なんだけどアンタの能力を応用して身体能力を上げることのできるアイテム。通称『バイタルアップ』って代物。」

愛佳は得意げに説明した

燎矢「バイタルアップー！？俺の能力を応用だあ！？・・・うつ！
ゴホッ！ゴホッ！！」

燎矢は大声を出した拍子に氷を飲み込んでしまった

燎矢「テメエ・・・なあに勝手に俺のチカラを悪用してんだあ？」

愛佳「悪用じゃないわ。バカ・・・アンタのチカラは人を護れる可能性を持っていると私は思ったから・・・だから、私はバイタルアップーを作った。」

燎矢はファミレスのブラインドの向こう側を歩く人の流れを見ながら言った

燎矢「俺のチカラは誰も護れやしない・・・それに、こんな、ただ身体能力を向上させるだけしか能のないチカラでも悪人が使えばどうなるか、お前も想像できない訳じゃないだろ？」

愛佳「それは・・・でも、あの事件は燎矢のせいじゃない！燎矢のチカラは私を護ってくれた。炎と瓦礫の中から私を助け出してくれた！確かに燎矢の言いたいこともわかるけど、それでも私は燎矢のチカラを誰かのために役立てたい。私のように燎矢のチカラで救わ

れる人が一人でも増えて欲しいから・・・」

愛佳の目には涙が浮かび上がっていた

燎矢「愛佳・・・お前の気持ちはわかった。だが、今生き残っているのは俺とお前だけだ。それが答えなんだよ。」

愛佳「！！・・・わかった。そこまで言うなら開発は凍結にする。だけど、いつか、燎矢が自分を許せたとき・・・開発を再開することにするわ。そうなったら燎矢のチカラ貸してもらわよ！まだまだ、改良の余地はあるんだから、アンタにも手伝ってもらわなくちゃ。」

燎矢「・・・ホント、負けず嫌いな女だな。そんなことばっかしてつと、嫁の貰い手がなくなるぞ？」

そう言つと燎矢は少し笑った

そして、愛佳も少し笑って燎矢に言い返す

愛佳「余計なお世話よ。バカ。」

燎矢「可愛くねえ奴。お前にファンクラブがあるなんて信じられねえよ。」

愛佳「ファンクラブ？なにそれ？」

愛佳はきよとした表情だ

燎矢「なんかあるらしいぞ。お前のファンクラブがよ。どこのどいつだよ、見た目はクールだが中身はとてもがさつな女のファンクラブなぞ立ち上げた奴は女を見る目がないのかね？」

燎矢は皮肉たつぷりに言った

愛佳「が、がさつてなによ！大体、アンタは・・・」

・ピリリリ、ピリリリ・

愛佳が怒りかけたとき愛佳のケータイが鳴った

愛佳「はい、もしもし？・・・わかりました・・・はい、はい・・・ここからですと・・・5分で着きます。では、後ほど。」

愛佳は淡々とした電話を終えるとテーブルの上にある伝票を手に取った

それと同時に燎矢が愛佳に言い放つ

燎矢「呼び出しか？大変だねえ、カガクシヤ様は。」

愛佳「フン、万年暇のアンタがうらやましくなるわ。」

そして、愛佳は伝票をちらつかせながら燎矢に言った

愛佳「今日は私が払っておくから。」

燎矢「んじゃ、お言葉に甘えて。」

愛佳「・・・貸しよ。」

燎矢「可愛さのかけらもねえ。」

愛佳「うるさい。それじゃ私は行くから。」

愛佳はレジで会計を済ませると、足早に行ってしまった

燎矢「ったく、あいつのせいで柄にもなく浸っちゃまったじゃねーか、俺は過去を振り返らないのがモットーなのによ・・・にしても、注

文したものが1つも来ないとはどういうことだ。あいつが頼んだコーヒーすら来ない・・・っか、さっきより店員すくなくねーか？
おいおい、みんなでトイレタイムとかじゃないだろうな？」

とりあえず燎矢は呼び鈴を鳴らした

- ピンポーン -

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

返事がない

もう一度鳴らした、今度は二度押しだ

- ピンポーン、ピンポーン -

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

やはり返事がない

燎矢「何で返事がねえんだアアア？いきなり倒産でもしたのか？こ
うなれば奥の手・・・」

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン・・・

燎矢は呼び鈴を連打した

燎矢「さすがにこれで来るだろ。」

すると奥から人の気配がした

燎矢「やつときやがったか。おい、何分待たせんだこの店はよお？」

燎矢が文句を言いながら顔を上げると身長2メートル以上はあるであろつ巨漢がそこに居た

燎矢「こりやまた、随分とでかい店員だな。アンタ、人間ですか？」

巨漢の男は黙つたまま燎矢の方をゆっくりと見る

燎矢「なんだよ、日本語通じねえのか？それとも、言語が分からないのか？なんか言ってみろよ、おい。」

燎矢がそう言い放つた次の瞬間、-ゴンツ-という音とともに鉄のように硬い何かが勢いよく燎矢の後頭部に当たった。と同時に、燎矢の体はテーブルを砕き床に突つ伏した
それに気がついたほかの客たちは悲鳴を上げ、逃げようとした。

巨漢「うるさいぞお。俺は人間だあ！しかも、能力者なんだぞお！
！みるお、この右手をお！！鉄なんだぞお！」

巨漢の男は能力で鋼鉄化した右手をぶんぶんと回しながら倒れている燎矢に向かってゆっくりとした口調で言つた
すると奥の厨房から銃を持った男たちが次々と出てきて、客たちに

銃を向けた

そして、最後に出てきたリーダー格らしき男が客たちに大声で言った

リーダー格の男「静かにしろ！！このファミレスは俺たちスキルアウト『デイメンター』が制圧した。貴様らは俺たちの活動資金のための人質なんだよ！！ちよつとでも騒いだり、怪しい行動したらそこに倒れている男のようになるからな。理解力のある奴は指示に従え！」

そう言うお客たちは皆、黙った

そして、男たちの指示通り一箇所に集まった

すると、巨漢の男がリーダー格に言う

巨漢の男「なあ、リーダー、この男はどおするう？」

リーダー格の男「放っておけ。俺は腹が減ったから奥に居る。なんかあったら呼べ。」

巨漢の男「わかったあ。」

リーダー格の男は厨房の方へ行った

巨漢の男「いいなあ、リーダーばかりい。俺も腹減つ・・・」

巨漢の男が言いかけた瞬間、約2メートルの巨体が宙に上がり、ものすごい衝撃とともに床に落下した

部下「な、なんだ!？」

奥に居たリーダー格の男が物音に驚いて駆けつけてきた

リーダー格の男「何事だ? な、丸山! ? おい、いったい何が起こったか説明しろ! 」

リーダー格の男はそこに倒れている『丸山』という名前がぴったりの容姿をした巨漢が気絶している経緯を部下に聞いた

部下「わ、わかりません。ただ、すごい物音がしてそっちの方を見たときにはもう、丸山さんは・・・」

その時、聞きなれない声が聞こえた

「??? ああ、悪い悪い。そのでかいの暑苦しいから寝かしちま
ったよ。」

リーダー格の男「き、貴様は丸山にやられたんじゃない?」

「??? 丸山? ああ、そいつのことか。ったくよお、人の頭を鉄で
殴りやがつて! まだ、少し痛えじゃねえか、血いでたらどうすんだ
この野郎!」

リーダー格の男「な、なぜ、鋼鉄で殴られたのに何で平然としてる
んだ・・・な、何者だ貴様!」

リーダー格の男は哑然とした口調で問いかけた

「??? 俺か? 俺は泣く子もあやす便利屋。紫堂燎矢さんだア。覚
えとけ!」

2 に続く

ブローグ〜7月21日（はじまり）〜 #2

リーダー格の男は鋼鉄で殴られたにもかかわらず平然と立ち上がったその男を啞然とした表情でみつめた

燎矢「おいおい、なんかリアクションしろよ。一人で盛り上がって恥ずかしいじゃねえか。」

リーダー格の男「な、何なんだお前は！！なんで、そんなピンピンしてんだよ！？」

燎矢「そりゃ、あれだよ。体が丈夫だからだ。」

リーダー格の男「丈夫で済むわけねーだろ！？」

燎矢「うるせえ奴だな、お前。つか、覚悟はできてるんだろっな？」

燎矢は首を軽く回し、スキルアウト達を睨み付けた

リーダー格の男「か、覚悟だあ？ テメエがいくら丈夫でも一人での人数相手に勝てると思ってんのかあ！？」

リーダー格の男は少し怯えた様子で燎矢に言い放った

燎矢「ああ、楽勝だな。」

燎矢はざっと10人は居るスキルアウトを見渡しながら余裕顔で言
った

すると突然、部下の一人が大声で言い放った

部下「貴様、俺たちを馬鹿にするなよおお！！！！」

その部下は警棒を振り上げ燎矢に向かって突進してきた

燎矢「馬鹿が・・・」

突進してきた部下の視界から燎矢が消えた

部下「!？」

リーダー格の男「馬鹿野郎!上だ!!」

部下がその言葉に反応しようとした刹那、部下の脳天に燎矢の踵が直撃し、鈍い音をたて床に倒れこんだ

燎矢「あーあ、後先考えないからこうなんだよ・・・さて、次はお前だ、ヘンテコ頭。覚悟はできたかい？」

燎矢はリーダ格の男に向かって言った

リーダ格の男「これはドレッドヘアーだ！ヘンテコ頭じゃねえ！
」

燎矢「なんだっていい、それよりテメエ名前は？」

リーダ格の男「なんで、名前なんて聞くんだ？」

燎矢「そりゃ、決まってるじゃねーか、墓石に名前刻むためだよ。」

燎矢はおどけた口調で言い放った

孤沙「墓石に刻むだと！？フツ、面白い奴・・・教えてやるよ、俺は孤沙だ。お前を殺す奴の名前だ。死んでも忘れるなよ。」

燎矢「・・・・・・・・逆から読むとだな。」

孤沙「逆から読むな！！孤沙だ！！コザ！！！！！」

孤沙は必死に訂正した

燎矢「いや、マジで逆から読んだら・・・」

孤沙「それ以上言っなああ！！！！」

孤沙はさっきよりも必死に言い放つ
そして、目を血走らせて続けた

孤沙「よくも、俺の言われたくない事を口にしたな・・・お前はここで絶対に殺す!!」

燎矢「やってみろよ、ザコ。」

孤沙「だから、孤沙だって言ってるだろうがぁ!!!」

孤沙はナイフを取り出し燎矢に向かって投げつけた

燎矢「こんなので俺を殺せると思ってるとはなぁ!!」

燎矢が飛んでくるナイフを蹴り落とそうとしたその時、ナイフが空中でピタリと止まったかと思われ、燎矢の蹴りを避けるかのように少し後退した

燎矢「なにっ!？」

燎矢の蹴りは空を裂いた

孤沙「残念だったな、俺は能力者だ。」

ナイフは燎矢の心臓をめがけ、もの凄い速度で飛んできた

・・・ナイフが刺さる音と共に床に血が流れる

孤沙「あ、案外チヨ口だったな・・・お、お前は俺の怒りを買った。それが死を招いたんだよ!!アハハ、アッハハハハアア!!」

「???」誰の死を招いたんだ？」

孤沙「あの、便利屋に決まってるじゃ・・・」

孤沙はまさか思い、後ろから聞こえる声の方を向いた

孤沙「な、なんで??? 確かにナイフは・・・」

孤沙は動揺し怯えながら言った

燎矢「ああ、確かに刺さったぜ。ただし、ここだけだな。ビックリしたか？」

燎矢は軽口を叩くと同時に右手の甲を見せる
そこにはあのナイフが刺さっていた

孤沙「な、あれに反応したのかよ!？」

燎矢「俺の能力はちつとばつか特殊でな。ま、まだ使っていないけど
な。」

孤沙「じゃ、じゃあ・・・」

燎矢「特殊なのはこれだ。」

そう言つと燎矢は右手の甲に刺さっているナイフを抜いた
すると、傷跡がみるみる治っていく

孤沙「超回復・・・!？」

燎矢「まあ、似て非なるものだ。どのみち俺にはこんなおもちゃ効
かねえぜ。」

孤沙「あ・・・あ・・・」

燎矢「こんど俺を殺したきや、時間でも止めるこつたな。」

燎矢は孤沙の顔に強烈な回し蹴りを喰らわせた

孤沙の体はショーウィンドウを突き破り外に吹き飛んだ
それと同時にアンチスキルがぞろぞろと店内に押し寄せた

燎矢「まったく、もっと早く対処しろよ。」

燎矢が店から出ようとしたその時、一人のアンチスキルが燎矢を呼び止めた

アンチスキル「待ちなさい!!」

燎矢「あ？」

- ガチャ! -
鈍い金属音がした

燎矢「ん？・・・な、なんじゃこりゃあああ！！！！！！！！」

燎矢は絶叫した

なぜなら、燎矢の手首には手錠が掛けられていたからだ

燎矢「待て！俺は被害者だ！！」

アンチスキル「なら、その血はなんだ？」

燎矢の服とズボンの裾には血がしっかりとついていた

燎矢「こ、これはだな・・・」

アンチスキル「話なら支部でゆっくり聞いてやる。」

燎矢の話を遮るようにアンチスキルは言った

燎矢「う、嘘だろおお!!!!」

#3に続く

プロローグ〜7月21日（はじまり）〜 #3

天に届くのではないかと思うくらい高いビルが立ち並ぶ市街地をアンチスキルのマークが入った三台のバンが目的地に向かい走っている先頭のバンに乗っている男、紫堂燎矢は苛立ちが100%顔に表れていた

何故ならば、彼は無実？の罪でアンチスキルに拘束されてしまったからである

長身のアンチスキル「なんだ、そのツラあ？なにか文句でもあるのか？」

長身で嫌みつたらしい顔のアンチスキルが嫌味な口調で燎矢に問う
燎矢はいつもの軽口で言い返す

燎矢「文句だあ？・・・んなもんあり過ぎて絶賛セール中だ。まあ、アンタみたいな権力を振り撒くだけの坊ちゃんに言う文句なんかねえけどよ。」

長身のアンチスキル「な、お前、ふざけるのも大概にしる!!」

そう言うとき長身のアンチスキルは燎矢の顔を殴りつけた
さらにもう一発、反対側からも殴りつける

燎矢「・・・ぐっ!!」

燎矢の唇からは血が滴り落ちた

長身のアンチスキル「お、大人を馬鹿にするからこうなるんだ!!
ざまあみろ!!」

息を荒げながら燎矢に向かって言い放った
よほどプライドが傷つき苛立ったのかその顔には薄ら汗を掻いている
燎矢は血を滴らせたまま、睨み付けまた軽口を言った

燎矢「まったく、痛えなあ・・・仮にもアンタ教師だろ？それより、どした？汗かいてるぜ？いやあ悪かったな、アンタのちっせえプライド傷モンにしたみたいでさあ。だが、俺の顔を2回殴った代償はゼツテ払って貰うからな。」

そう言い終わると燎矢は小さな笑みを浮かべ下を向いた

長身のアンチスキル「き、貴様あ！！！」

そう言い燎矢にまたも殴りかかるうとしたが、短髪のアンチスキルに羽交い絞めにされた

短髪のアンチスキル「その辺にしておけ！隊長に知れたら、ただじやすまないぞ！？」

長身のアンチスキル「隊長なんか関係ない！！コイツをぶっ殺さなきゃ気が治まらない！！！」

短髪のアンチスキル「そうやって何人のスキルアウトを病院送りにしたと思っっている！？それにそろそろ到着する。いい加減にしろ！お前はやりすぎだ。」

長身のアンチスキル「クソッ！！」

どうやらこの長身のアンチスキルはキレイやすい性格でプライドが高いらしい・・・

燎矢がそんなことを考えていると、バンはゆっくりと停車し後方の扉が開く

それと同時に日没前のオレンジ色をした夕日が燎矢を照らした
燎矢は外に出ると手錠で繋がれた腕で光を少し遮った、長時間光の入らないバンに乗っていたせいで夕日が眩しく感じたのだ

辺りを見回すと別のバンが燎矢の横を通り過ぎてゆく

どうやらケガ人は別の施設に運ばれるようだ

その時、遠くから大きな声がした

女の声だ

????「ようこそ、問題児くん！」

声の主が建物の入り口から燎矢たちの方に向かって歩いてくる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3498q/>

とある男の拘束具（ハンドカフ）

2011年10月8日15時36分発行